

「君の過去にも未来にもマーケティングが見えない」

第9期 勿本 慎弥

みなさんはこの言葉を知っているでしょうか。そう、あれは私がゼミ生になる直前、入ゼミ試験の先生面接にて、先生からいただいた言葉である。ここから私の2年間は始まるわけである。他の団体や社会人になってからでは経験できないであろうことによって埋め尽くされた、私の2年間は始まるわけである。

まず、ゼミ生になれた瞬間のことを書き残しておきたい。正直なところ、私は小野ゼミに入会できないであろうと絶望しながら、入ゼミの結果発表を待っていた。その理由は、私の卒業エッセイのタイトルから察していただければ幸いである。しかし、受かることができた。合格者発表の掲示板に自分の学籍番号があった、あの時の感情を今でも鮮明に覚えている。大きな声を出して喜びたかったが、周囲の人の目が気になり、どこにその感情をぶつければいいのか迷った。その一瞬の迷いの後に、私は、秋山に隠してもらい、小さく「やった」と言った。

次に、三田論執筆のことを書き残しておきたい。こんなに怒られたことがあるでしょうか。これは、9期生全員が思っていることであろう。特に、十ゼミチームは多くのミスをやらかした。本当にたくさん怒られた。そんなチームが、十ゼミ本大会にて最優秀賞と論文賞、そして商学会賞をもらった時、本当にたくさんほめられた。いい経験であったと感じている。

また、4年生になってからも、卒論と同じくらい、もしくはそれ以上に集中したことがある。夏ケースである。何があったのか。短く説明すると、私たちが夏ケースの解題文を完成させた時期は、冬であった。冬であったのである。先生やゼミ生には多大なご迷惑とご心配をおかけしたことをお詫び申し上げたい。夏合宿に間に合わなかった多くの原因の1つに、私の貢献不足が挙げられるであろう。ゼミ生からの冷ややかな目、夏ケースメンバーの不仲説、終わりの見えない解題文。幾度となく心は折れたが、なんとか完成させることができた。解題文がカタチになった時、私は安堵した。

以上のように、私の2年間は、私の感情が下げられた後に上げられる場面によって埋め尽くされている。唯一残っている、上げられていない感情があるので、ここで言うことにする。

先生、少しでもいいんです…勿本の過去や未来にマーケティングは見えますでしょうか？

私がこんなことを言うと、9期生は鼻で笑うであろう。先輩や後輩は、無視するであろう。そして、先生は、「何を言ってるの、はねちゃん」とおっしゃるであろう。こんな毎日はないのかと思うと、嫌だなあ。卒業エッセイを書いている今、もし、2年前に戻れるとしても、小野ゼミに入会を希望する。